



写真で振り返る50年

学長就任にあたって

北海道医療大学 学長 三国 久美



4月より、浅香正博学長の後任として北海道医療大学の学長に就任しました。私は薬学部、歯学部に通じて1993年に設置された看護福祉学部の開設時から、本学に勤務しています。はじめて大学教員として採用された入職当初は何もわからない状態でしたが、本学で出会った様々な教職員や関係者に支えられ、やりがいをもって教育や研究に取り組んできました。また、私は本学大学院看護福祉学研究科を修了しています。私にとって、本学は恩師や共に学んだ仲間との出会いの機会を与えてくれた大切な母校です。学長は大学がその教育目的を達成するうえで最終責任者に位置づけられます。このたび、教員としての自分を育ててくれた本学において、学長という任務を担うことに責任を感じるとともに、より魅力ある教育を提供するために何ができるかを思案しています。

今年は、本学の創立50周年という節目の年にあたり、記念事業が計画されています。これまで歴代の学長を中心とした諸先輩および教職員のご尽力により、この50年間で本学は北海道内でも有数の6学部9学科を擁する医療系総合大学となりました。本学の教員になり30年たちますが、何年たっても新入生が卒業するまでに知識や技術を修得してどんどん変化し、成長していく姿を目の当たりにして頼もしさを感じます。また、今まで本学では2万4千人を超える卒業生を輩出しており、国内外での様々な分野における卒業生の活躍は高く評価されています。そして、卒業生が生き生きと活躍している様子を知ることは私たちにとって、最もうれしく、誇りに思うことでもあります。

本学では、4年後の2028年に北広島市のFビレッジ内にキャンパスを増設する計画を進めています。Fビレッジはエスコンフィールドをはじめ、様々な施設が作られ、多くの人々が行きかう賑わいがあり、今後もさらなる発展が期待されます。当別キャンパスや札幌あいの里キャンパスでの充実した学修環境と同様に、新キャンパスでも学生の皆さんののびのびと勉学や学生会活動に取り組めるよう、私たち教職員みんなでサポートしていきます。

保健医療福祉分野に期待される役割は、時代の要請によって変わります。本学では多職種連携教育に取り組んできましたが、さらなる充実と体系化が求められています。また、現代において、欠くことのできないテクノロジーであるAIが急速に進歩し、人々の生活のみならず保健医療福祉分野の仕事に大きな影響を与えています。本学では、2021年からDX推進計画に沿い、データサイエンスに関する科目を配置しています。将来の予測が難しい現代において、主体的に考え、チームメンバーと協力し合い、課題の解決に向けて柔軟に対応できる人材を育てるために、大学にはどのような役割が求められているのかを考え、より質の高い教育や研究を進めていきます。加えて、地域貢献の取り組みについても、教職員や学生ができることを考え、効果的に提供するための組織的な体制を作りたいと考えています。

少子化がますます進行し、大学を取り巻く環境は厳しい中、北海道医療大学がこれから先も「選ばれる大学」として発展していくために力を尽くしたいと考えておりますので、何とぞよろしくお願いいたします。

CONTENTS

学長就任にあたって	1
定年を迎える先生からのメッセージ	2
教員役職者・新任教員・昇任教員等紹介	5
同窓会活動状況	6
創立50周年記念特別企画 第2弾 今後の医療大に期待すること	8
プロジェクト演習 看護福祉学部 福祉マネジメント学科3・4年次	10
卒業生訪問 [理学療法学科]	11
TOPICS	12
EDITOR'S NOTE	

定年を迎える先生からのメッセージ



薬学部
教授

岡崎 克則

「北海道医療大学での19年間を振り返って」

2005年2月、一面の雪野原の中ディーゼル列車に乗り来学。当時の廣重学長、黒澤薬学部長・和田教務部長の面接を受け、お昼時となる。20周年記念会館のカレーがやけに黄色く、殆ど味がしなかったことを記憶している。

2009年春、ブタに由来する新型H1N1インフルエンザウイルス(H1N1pdm)が出現。瞬く間に世界中に拡散し、パンデミックが宣言される。6月には札幌でも患者が報告され、本学内科クリニックにおいてもA型インフルエンザ患者を確認。かねてより歯学部内科学教室の家子先生にお願いしてあった通り、患者の鼻水を頂戴。分離ウイルスの遺伝子を解析したところ、H1N1pdm。秋には臨床福祉学科及び薬学科で学年閉鎖。得られた70株余りのウイルスの解析結果をPhylogenetic analysis of pandemic influenza A (H1N1) virus in university students at Tobetsu, Hokkaido, Japan (Microbiol. Immunol., 2012)に発表。表題のミソは、言うまでもなく「当別の大学生」である。

2011年3月、東日本大震災発生。丁度、卒業式に訪れていた大学時代の友人と話している間に長い揺れ。教室所属学生の実家にも大きな被害あり。

2013年、中央講義棟竣工。当初は、ほぼ薬学部専用で3階建て。講義が随分やりやすくなった。しかし、本当に10階建てになるとは!

2018年の北海道胆振東部地震では全道がブラックアウト。ドライアイスを大量に買い込み、ディープフリーザーに投入。凍結していた細胞、ウイルスは事なきを得た。

2020年、新型コロナウイルスによるパンデミック発生。5月半ばからの無人講義室での講義。翌年、志村けんが亡くなったのはショックであった。一方、不謹慎ながらウイルス屋としては心躍る面も。NHKデビュー、道新夕刊のトップ掲載などを経験する。

2023年1月、大雪のためJR、国道275号線がストップし、陸の孤島と化す。非常食と毛布が支給され、大学泊。徹夜予定の学生が登校できず、2回のサンプリングを代行する。

同年9月、北広島キャンパス増設決定。実験室が随分小さくなるらしい。学生は確保しやすくなるだろうが、研究活動にも一層注力し、本学が益々発展することを祈念。

多くの方々に支えられ、大過なく19年間を勤めることができた。心から感謝いたします。



歯学部
教授

古市 保志

「本学着任後の年月を振り返って」

2004年12月に本学歯学部歯科保存学第一講座(現、咬合修復・再建学系 歯周歯内治療学分野)教授に着任して19年の月日が経過しました。私は鹿児島出身で前任地の鹿児島からの着任でしたがスウェーデンへの滞在経験があったので冬の寒さはそれほど気になりませんでした。反面、北海道の雪の多さに圧倒され、JRで石狩川を越えたあたりから車窓に広がる真っ白な雪原と遠方に見える雄大な大雪連山、そして時折舞うダイヤモンドダストに感激したことを覚えています。その後は新緑が芽吹く春先、梅雨とは無縁の初夏、快適な夏、そして紅葉の映える秋を満喫しながら、月日を過ごしてきました。医療系総合大学の1構成員である本学歯学部、特に臨床系分野所属の教員には、教育・臨床・研究を総合的に遂行することが求められています。分野の主任教授であると同時に2009年～2019年は北海道医療大学医科歯科クリニック(現、歯科クリニック)院長、2019年から2024年には歯

学部長を拝命し、その責務を全うすべく試行錯誤の繰り返してした。特に近年のコロナ禍では、通常業務に加えて関連する感染対策、講義・実習様式および日程の調整等、種々の対応に追われ、気が付いたら今年度になっていたという感も否めません。とは言え、19年間に多くのことを学び、経験させていただきました。至らぬところも多々あったと思いますが、これもひとえに、これまでお世話になりました諸氏によるご指導、ご鞭撻の賜物と心から御礼申し上げます。超高齢社会における18歳人口の減少とそれを取り巻く社会の多様化が進んだ現在、医療や大学の在り方にも大きな変革が求められているようです。2028年4月に予定されている本学の北広島市へのキャンパス増設も踏まえ、これからも選ばれる大学そして歯学部としての北海道医療大学および北海道医療大学歯学部の益々の発展を祈念致します。

With heartfelt thanks.



歯学部
教授

中山 英二

「定年退職にあたって」

2007年7月から本学歯学部歯科放射線学分野教授として赴任しました。2024年3月をもちまして定年退職いたします。この間お世話になりました教職員の皆様、本学関係者の皆様、学生の方々に深く御礼申し上げます。

わたしの出身は大分県杵築市という田舎です。1年の浪人後に九州大学歯学部に入學し、全学のワンダーフォーゲル部に属して学生生活を謳歌しました。学生のころ、恩師の神田重信先生（現名誉教授）が「歯学の総合画像診断を目指す」と力強く宣言されたのに感銘を受け、卒業後は歯学部歯科放射線学教室に入局しました。一時期は山梨医科大学（現山梨大学）医学部歯科口腔外科にも在籍し、口腔外科の基礎を学びました。「画像診断」が大好きで、臨床とその教育に没頭していましたが、研究者としてはさしたる成果も出ずに過ごしていました。しかし、たまたま初めて投稿した英語論文が受理され雑誌に掲載されました。すると、知らない国外の研究者から論文の別刷りを求められ、やっと英語論文で研究成果を公開する喜びに目覚めました。その後ははまはま英語論文を発表できるようになりました。その後、准教授まで務め、そ

の間はHarvard大学関連のEye and Ear Infirmaryに文科省在外研究員として短期留学もしました。

その後、2007年に北海道医療大学に赴任しましたが、見知らぬ土地で不安がありました。しかし、妻が毎日手弁当を休まず作ってくれて、それが励みとなりました。妻と子供たちに感謝します。

また、周囲に「杵築市」など知った人はいないと思っていましたが、歯学部同窓会誌の記事で出身地を記載したところ、すぐさま歯学部1期生から同郷（小中学校が同じ）である旨のメールをいただき、非常に嬉しく、不安が和らぎました。また、ある課長も実は同郷（同じ市内）であることもわかり、心強く思ったものでした。

さて、在職中は自慢できる大きな成果も上がりませんが、教育には力を入れてまいりました。そのなかで、卒業試験問題がよく国家試験問題と類似すると言われ、30期卒業生から医療大初の「連続的中賞の殿堂入り教授」の認定を頂きました。これだけは私の誇りです。

最後に、歯学部をはじめとする北海道医療大学のますますのご発展を祈念致します。有難うございました。



歯学部
教授

奥村 一彦

1987（昭和62）年の4月より本学歯学部の教員に採用され、今年2024（令和6）年3月で退職を迎えました。37年間の長きにわたる大学教員生活を無事に納めることができましたのも、大学事務をはじめとするたくさんの教職員の皆様に助けていただいた結果と存じます。あらためて、感謝を申し上げます。

私は、助手の採用を出発点、講師、准教授、教授を拝命いたしましたので、常に教育現場で育成されました。それと、同時に口腔外科臨床においても、旧口腔外科第1講座教授でありました、故金澤正昭先生に師事し技術をはじめとした小手術や、口腔癌手術、顎変形症等を通じて、幅広い臨床での手技を学びました。このことは、教育の現場でも活かすことができました。

本学の立地条件は、学生にとっては自然環境抜群の中で学びを深くさせることができ、私たち臨床分野においては、当別町を中心に患者様にお越しいただき、近年では参加型臨床実習に快く協力して下さって学生と共に教員もたくさんの学びをさせていただいたことに感謝申し上げます。

とても嬉しく思うことは、こうやって当別町の町民の方から協力をいただいた結果、本学を卒業し立派な歯科医師と

なった卒業生をたくさん送ることができたことです。何編もの学術論文を生産することより価値があると確信しています。

さて、退職後を現時点で想像すると、不安もある一方、何か新鮮な世界に歩みを進めることに期待が膨らむ一面もあります。これからは、自分も含めて高齢化社会の中で生きていかなければなりません。私の父親は開業医の2代目で、子供の時にみていた父親は遅くまで診療をしていた記憶があります。当然、子供達の夕飯は遅くなり、出てくるおかずは、いつも酒の肴でした。その時は、オムレツやハンバーグが良いのにとうらやみもしました。しかし、年齢を重ねると父親そっくりの晩酌人間となってしまいました。そこで、高齢化とどんな繋がり？と思われるかもしれません。実は、日々心も体も健康でない、お酒は美味しくいただけないということです。ですので、高齢者の方々に口から美味しいものをいただけるよう口腔管理のお手伝いをしたいな…、歯科医師人生まだリタイアせず、日々精進したいと思っております。

最後になりましたが、北海道医療大学の6学部9学科で多職種連携によって北海道の医療を支えていただき、本学の益々のご発展をお祈り申し上げます。



看護福祉学部
講師
遠藤 紀美恵

新型コロナウイルス感染症が第5類となり日常生活の制限が少しずつ緩和され、元の生活に戻つつある中、元日には能登地震が発生。お亡くなりになった方、被害を受けられた方、今なおご不自由な避難生活を送られている多くの方に心からお見舞い申し上げます。

定年を迎えるにあたり教員生活について振り返ってみたいと思います。私が看護教育と関わるようになった経緯は、看護師として4年目を迎え、仕事にも慣れてきたころ。「看護の専門性とは」、私が日々行っていることは「看護なの?」という疑問が湧いてきました。そんな時、北海道が主催している看護教員養成講習会に参加する機会を得ました。

講習会には、全国から50人ほどの現役の看護教員やこれから看護教員になる方が参加し、5月から10月の6ヶ月間に看護や教育課程、学校運営、実習指導、教育学などの講義を受けました。私は看護の専門性や教育の事もあまり良く分からないまま終了いたしました。終了後は苫小牧市立病院附属看護学校、次に札幌医療福祉専門学校、そして平成16年に専門学校の閉校を機に大学に就職いたしました。大学は基本的に個人で教育と研究活動を行なうところ、1年目の私

は時間を余しており、時間潰しに大学構内を探検していました。この体験はオープンキャンパス時に大変に役立ちました。

実習指導や卒研ゼミを通し、学生から看護の感動を頂きました。また実習指導では、砂川、岩見沢、江別、苫小牧と地方の担当が多く、母性看護学の実習は1月から3月初めまでの冬季間のため、まだ薄暗い朝に電車で出かけ暗くなって帰宅する毎日でした。砂川市立病院での実習中、ここ数年は度々あることですが大雪でJRが運休し帰宅できず、学生と宿泊先を探し、やっと一軒の下宿を見つけて砂川に一泊したこともあり、冬季間の実習には苦労いたしました。今は楽しい思い出です。卒業生たちが看護職として活躍されている様子や親になり育てに頑張っている様子をお聞きし嬉しく思います。

学科会議の着任挨拶では、緊張で頭が真っ白になり「ビールが大好きです」と失言を発してしまいました。その後も数々の失言を発してきた私を優しく見守って下さった看護学科教員の皆様には大変に感謝しております。皆様のご配慮の元で楽しく仕事をすることができました。ありがとうございます。

最後に皆様の益々のご活躍と北海道医療大学のご発展を御祈り申し上げます。



看護福祉学部
教授
濱田 淳一

「雑感:定年退職」

とうとう、この日がやってきました。達成感とか、65歳までよくがんばったな感はありません。どちらかという寂寥感というか、まだまだやれますよ的な気持ちの方が勝っているでしょうか。

北海道に憧れて高校卒業と同時に、希望に胸膨らませて津軽海峡を渡ってきたのを昨日のように思い出します。思い描いていたとおり、自然は雄大で魅力にあふれ、そして新生活は新鮮で、自由で、刺激的で、たちまち北海道の虜になってしまいました。以来、米国留学の3年間を除けば、44年間この北の大地に根を下ろし生活してきたこととなります。8年前に小林正伸先生(当時看護福祉学部教授)から「こんなあるよ(教授公募の案内)」とお知らせいただいたのがきっかけとなり、医療大でお世話になることになりました。それまでは、がん細胞と担当がんマウスに囲まれて、「わかってないことを誰よりも早くわかってやろう」とがん転移の研究に没頭していました。医療大の門をくぐってからは、「わかっていることをわかってもらう」という方角にコンパスを合わせ歩を進めることになりました。最初の1年間は講義の準備にとてもご舞いでしたが、これが全く苦にならず、実に楽しい作業なんですよ!講義に使っている解剖学、

生理学、病理学の教科書などを読んで、「どうして?」とか「ほんとう?」などと思うことがあると、とことん調べたくなるわけです。そして、「おー、なるほどね!」とか「ヒトの体は奥が深いな!」と思わず唸ってしまう事実と遭遇することがままあります。これが快感で、やめられませんね!また、講義後に学生さんから予期せぬ質問を浴びせられることがあります。私のこれまでの人生で考えつかなかったことを、たかだか80分の講義中に思い浮かべるわけですから、学生さんの発想力には思わず頬がゆるんでしまいます。ちなみに、最も印象に残っている質問は、「受精しなかった精子は卵管采を突っ切って腹腔内に入るのですか」と「母体に生じたがんが胎児に転移することはあるのですか」のふたつです。みなさまならどのように回答されますか。このように講義は準備も含めて、私の知的好奇心をくすぐる絶好の機会となり、できることならまだまだ続けていきたいものです。

最後に、この8年間、病気もせず、事故にも遭わず、好き勝手な学生生活を送ることができたのも、ひとえに医療大教職員のみなさまのご協力と心配りのおかげと感謝しております。みなさまの健康とますますのご活躍をお祈りし、筆をおきたいと思ひます。

以上の諸先生のほか、
薬学部 遠藤 泰 教授、吉田 栄一 教授、
歯学部 水谷 博幸 講師、
看護福祉学部 薄井 明 教授が
定年を迎えられます。ありがとうございました。



薬学部
教授
遠藤 泰



薬学部
教授
吉田 栄一



歯学部
講師
水谷 博幸



看護福祉学部
教授
薄井 明

教員役職者・新任教員・昇任教員等紹介

新規選出教員役職者

学長	三国 久美
副学長	和田 啓爾
薬学部	薬学部長 浜上 尚也
	教務部長 村井 毅
	教務部副部長 小島 弘幸
	教務部副部長 小林 健一
	学生部長 平野 剛
	学生部副部長 柳川 芳毅
	学生部副部長 泉 剛

歯学部	教務部副部長 豊下 祥史
	学生部長 細矢 明宏
	学生部副部長 入江 一元
看護福祉学部	看護福祉学部長 山田 律子
	看護学科長 桑原 ゆみ
	学生部副部長 明野 伸次
心理科学部	教務部長 森 伸幸
	学生部長 野田 昌道
	学生部副部長 柳生 一自

先端研究推進センター センター長 太田 亨
全学教育推進センター 副センター長 堀内 正隆
総合図書館長 小林 道也

新規特任教員

歯学部	教授 古市 保志
	教授 中山 英二
看護福祉学部	教授 濱田 淳一
	教授 高橋 亮

新任教員



薬学部 教授

前田 直良 (まえだ なおよし)

青山学院大学理工学部化学科卒業。筑波大学大学院医学系研究科理学専攻修士課程、東京医科歯科大学大学院医学系研究科ウイルス制御学専攻博士課程修了。北海道大学遺伝子制御科学研究所分子免疫分野助教、北海道大学大学院薬学研究所創薬科学研究教育センター特任准教授等を経て、本学就任。医学博士。



歯学部 講師

(口腔機能修復・再建学系(生体材料工学))
高橋 正敏 (たかはし まさとし)

東北大学歯学部卒業。同大学院歯学研究科博士課程修了。Baylor College of Dentistry visiting scientist、リリ歯科クリニック非常勤歯科医師、富澤歯科医院非常勤歯科医師、東北保健医療専門学校歯科衛生科非常勤講師等を経て、本学就任。歯学博士。



理学療法学科 講師

阿部 隆宏 (あべ たかひろ)

学校法人吉田学園札幌総合医療専門学校理学療法学科卒業。北海道大学大学院医学院循環病態内科学修士課程修了。医療法人臨生会吉田病院リハビリテーション科理学療法士、北海道大学病院リハビリテーション部理学療法士等を経て、本学就任。医学修士。



言語聴覚療法学科 准教授

永見 慎輔 (ながみ しんすけ)

リハビリテーションカレッジ札幌言語聴覚学科卒業。県立広島大学大学院総合学術研究科人間化学専攻修士課程、兵庫医科大学大学院医学研究科医学専攻博士課程修了。広島市立病院機構広島市立安佐市民病院言語聴覚士、川崎医療福祉大学リハビリテーション学部言語聴覚療法学科講師等を経て、本学就任。医学博士。

歯学部	任期制助手(口腔機能修復・再建学系(歯周歯内治療学))	藤本 芳樹
	任期制助手(口腔機能修復・再建学系(歯周歯内治療学))	岡田 裕吉
	任期制助手(口腔機能修復・再建学系(う蝕制御治療学))	中脇 和輝
	任期制助手(口腔機能修復・再建学系(咬合再建補綴学))	柴野 健士郎
	任期制助手(口腔機能修復・再建学系(クラウンブリッジ・インプラント補綴学))	松川 優貴也
	任期制助手(口腔機能修復・再建学系(高度先進補綴学))	片岡 歩武
	任期制助手(生体機能・病態学系(組織再建口腔外科学))	田村 昌樹
	任期制助手(生体機能・病態学系(歯科麻酔科学))	馬淵 比奈子
	任期制助手(生体機能・病態学系(高齢者・有病者歯科学))	藤丸 果乃
	任期制助手(口腔構造・機能発育学系(歯科矯正学))	山崎 祥太郎
看護福祉学部	助教(口腔機能修復・再建学系(歯周歯内治療学))	杉山 のどか
	助教(口腔生物学系(生理学))	島谷 真梨
	助教(総合教育学系(臨床教育管理運営))	松木 優子
	助教(看護学科基礎・統合看護学)	原 美希
リハビリテーション科学部	助教(看護学科生涯発達看護学)	野崎 由希子
	助教(看護学科生涯発達看護学)	鈴木 菜緒香
	助教(看護学科(基礎・統合看護学))	松浦 詠子
予防医療科学センター(医科部門)	助教(理学療法学科)	用田 歩
	助教(理学療法学科)	谷口 翔平
	助教(作業療法学科)	齋藤 隆司
	助教	金谷 莉奈

特別研究員

歯学研究科	REZON YANUAR(レゾン ヤマール)
	土田 仁

配置替教員

歯学部 講師(口腔構造・機能発育学系(保健衛生学))	村田 幸枝
予防医療科学センター 准教授(医学部門)	大村 一将

昇任教員



歯学部 講師

原田 文也 (はらだ ふみや)

本学歯学部卒業。同大学院歯学研究科博士課程修了。恵佑会札幌病院診療科医、北海道医療大学病院臨床助手II。本学歯学部生体機能・病態学系顎顔面口腔外科学分野助教を経て、講師昇任。歯学博士。



歯学部 講師

南田 康人 (みなみだ やすひと)

本学歯学部卒業。同大学院歯学研究科博士課程修了。釧路労災病院歯科口腔外科医員、北海道医療大学歯科内科クリニック臨床助手。同歯学部生体機能・病態学系組織再建口腔外科学分野助教、同歯学部生体機能・病態学系顎顔面口腔外科学分野助教等を経て、講師昇任。歯学博士。



リハビリテーション科学部 講師

山根 裕司 (やまね ゆうじ)

札幌医科大学保健医療学部理学療法学科卒業。同大学院保健医療学研究科理学療法学・作業療法学専攻博士課程前期・後期修了。医療法人仁陽会西岡第一病院リハビリテーション部理学療法士、同主任。本学リハビリテーション科学部理学療法学科助教等を経て、講師昇任。理学療法士。



歯学部 准教授

川西 克弥 (かわにし かつや)

本学歯学部卒業。同大学院歯学研究科博士課程修了。本学歯学部附属病院研修歯科医、同歯学部歯科補綴学第一講座主任助教授、同歯学部口腔機能修復・再建学系咬合再建補綴学分野講師、同歯学部総合教育学系臨床教育管理運営講師等を経て、准教授昇任。歯学博士。



薬学部 教授(生薬学)

高上馬 希重 (こうじょうま ませしげ)

近畿大学農学部農薬学卒業。同大学院農学研究科農学専攻修士課程、広島大学大学院医学系研究科分子薬学専攻博士課程修了。厚生省国立医薬品食品衛生研究所技術員、東京大学大学院農学生命科学研究科助手、本学薬学部創薬化学講座准教授等を経て、教授昇任。薬学博士。



先端研究推進センター 講師

北川 孝雄 (きたがわ たかお)

山口大学工学部応用化学工学科卒業。同大学院理工学研究科応用化学工学専攻博士前期課程修了。財団法人やまぐち産業振興財団専任研究員、株式会社豊田中央研究所ハイオク研究室専任研究員、山口大学大学院医学系研究科システム再生・病態化学講座 助教、本学先端研究推進センター助教等を経て、講師昇任。工学博士。



全学教育推進センター 教授

併任先:歯学部 教授(化学)

堀内 正隆 (ほりうち まさたか)

横浜国立大学教育学部小学校教員養成課程卒業。同大学院教育学研究科理科教育専攻修士課程、同大学院工学研究科物質工学専攻博士課程後期修了。北海道大学大学院薬学研究所助教、本学全学教育推進センター薬学部准教授等を経て、教授昇任。工学博士。



全学教育推進センター 准教授

併任先:歯学部 准教授(物理学)

中野 諭人 (なかの りょうじん)

電気通信大学電気通信学部量子・物質工学科卒業。同大学院電気通信学研究科量子・物質工学専攻博士課程前期・後期修了。電気通信大学電気通信学部量子・物質工学科助教、同大学院情報理工学研究科先端理工学専攻助教、本学全学教育推進センター歯学部講師等を経て、准教授昇任。理学博士。



全学教育推進センター 講師

併任先:看護福祉学部 講師(体育学)

福家 健宗 (ふくいえ たけむね)

筑波大学体育専門学群卒業。同大学院人間総合科学研究科体育学専攻博士前期課程、同大学院人間総合科学研究科体育学専攻博士後期課程修了。筑波大学体育専門学群ティーチングアシスタント、本学全学教育推進センター看護福祉学部助教等を経て、講師昇任。健康スポーツ科学博士。



全学教育推進センター 准教授

併任先:心理科学部 准教授(生命倫理学)

磯部 太一 (いそべ たいいち)

法政大学文学部卒業。東京大学大学院学際情報学府修士課程修了。東京大学グローバルCOE共生のための国際哲学教育センター(UTCP)共同研究員、日本学術振興会(東京大学医科学研究所公共政策研究分野)特別研究員PD、本学全学教育推進センター歯学部講師等を経て、准教授昇任。



看護福祉学部 准教授

(看護学科(基礎・統合看護学))

川添 恵理子 (かわぞえ えりこ)

北海道大学経済学部経営学卒業。本学大学院看護福祉学研究科看護学専攻博士前期課程修了。助産師中央病院看護部、全国社会保険協会連合会社会保険看護研修センター教育部長、本学看護福祉学部看護学講師等を経て、准教授昇任。



薬学部
同窓会長
桂 正俊

薬学部

〈創立年:1979年 会員数:約6,500名〉

薬学部同窓会は6,500名を超える会員が全国各地で活躍しております。現在同窓会の活動は、主にwebを利用した医療薬学セミナーや将来ビジョン講座などを薬剤師支援センターと共催で行っております。また、同窓会準会員である在学学生に対して、薬剤師国家試験対策講習会の追加や実務実習のケース代の補助そして国家試験に向けての勉強が本格化する5年生に対して、6年生の講義でも用いる薬剤師国家試験参考書(薬学セミナー発行の青本)の補助など様々な支援を行っております。一方、昨年は全国17支部(道内7、道外10)と医療薬学セミナーやその地域での薬業や医療に関する情報交換を行ったところです。今年度は全国の会員を対象とした拡大研修会及び埼玉県さ

いたま市で開催される第57回日本薬剤師会学術講演会に合わせて同窓会の懇親会を開催したいと考えております。薬学部同窓会は会員数の増加により、道内支部の細分化と道外の卒業生が減少していることから本州支部の統合やブロック化を含めた検討を進めております。今後は、しばらく開催を控えていた「卒業生・在学生合同懇談会」や「大学教員との情報交換会」など徐々に再開をしたいと考えております。

■ <https://www.hoku-iryuo-u.ac.jp/~phalumni/>
■ yaku-dousoukai@hoku-iryuo-u.ac.jp



歯学部
同窓会長
袁 隆宏

歯学部

〈創立年:1984年 会員数:約3,800名〉

平素、皆様におかれましては北海道医療大学歯学部同窓会の理念・活動に対して深いご理解と多大なるご協力のほど誠にありがとうございます。お陰様で今春、41期生が無事卒業し47期生が晴れて入学され会員数は準会員の学生を含め3800名を超えるまでの組織となりました。これもひとえに会員はめいめ大学並びに諸団体の関係各位のご尽力の賜物と心より感謝申し上げます。今年の始まりはとて悲しく辛いものでありました。元日の夕方に起きた能登半島地震では多くの方が被災され本当に苦しく悲しい思いをなされ、今なお続くご苦労にはどのような言葉を送ってよいのか分かりません。しかし、本会会員ご本人が被害を受けられるという大変な環境の中にも関わらず、口腔医療の責任を果たすべく、現状で行える治療と誤嚥性肺炎の予防に奔走されておられることは本当に頭が下がります。我々の誇りであり誉れである心から敬服する次第です。翌2日のJAL機の事故も含めて健康で過ごす当たり前の日々は決して当たり前ではないのだということ改めて教えてもらいました。「会員の福祉と親睦そして学術向上さらには学部の発展に寄与」することを目的に運営されている本会も本年秋に設立40周年を迎え、これまでの歩みを振り返ると感慨深いものがございます。この間、疾病構造の変化や周辺機器の発展など歯科界を取り巻く環境はもちろん、それに加え社会全体の価値観や人口動態の変化など、「在り方」や「やり方」が大きく変わりました。

た。このような環境の中で今年秋に開催する記念事業のテーマは「ON YOUR MARK～次なるステップへ～」、激動の40年を振り返ることによって来たる50周年がどんなものを創造する機会のひとつになればとの思いからです。また、コロナ禍で38、39、40、41期生の謝恩会が残念ながら開催出来なかったリベンジを含め、全ての同窓会会員及び関係者各位がこの4年分を少しでも取り戻すことが出来ればと思います。この集いがお一人おひとりの節目になることを願っております。そして、今年は本学創立50周年にあたる記念の年を迎えます。昨年飛び込んできた本学の北広島市ボールパークへの増設のビッグニュースを取り上げるマスコミ報道を通して、そのインパクトの大きさを感じたところでした。本会として移転に向けてどんなお手伝い出来るのかをしっかりと考えて、学生の幸せと母校発展の力になりたいと存じます。同じ学舎で学んだ仲間の緩やかなが本部同窓会と考えておりますが、これは学舎が変わっても本質は同じですので、今後とも協力ご指導を賜りますように衷心よりお願い致します。全ての方々のご多幸を心から願い歯学部同窓会からのメッセージと致します。

■ <http://www.hoku-iryuo-u.com/> ■ dousoukai-honbu@clock.ocn.ne.jp
■ 事務局 札幌市北区北6条西6丁目2-11 第3山崎ビル4F
TEL 011-299-9069 FAX 011-299-9609



看護学部
同窓会長
川村 武昭

看護福祉学部／看護学科・札幌医療福祉専門学校／看護学科

〈創立年:1997年 会員数:約2,800名〉

平素より同窓会活動については、格別の御理解と御協力を賜り厚く御礼申し上げます。おかげさまで本会(福慧会)の活動も令和9年(2027年)で30周年を迎える運びとなりました。偏りに頃から御尽力をいただいている同窓生の皆様をはじめ、各学部学科の同窓会役員の皆様、そして大学関係者の皆様の協力の賜です。この場をお借りして深く御礼申し上げます。さて、今年度は看護福祉学部が30周年を迎えた節目の年であり、本同窓会も学術大会の開催を通じて関わりを持つことができました。同窓会活動としては昨年度に引き続きコロナ禍の影響は受けましたが、無理のない範囲内で「withコロナ」として活動できた一年でもありました。私たち同窓会役員自身が医療従事者として各地域の保健・医療・福祉・教育等での現場を支えるエッセンシャルワーカーの一員であるため、私たちが倒れこまないことが何よりも大切なことだと感じています。今年度は再稼働した動きが止まらないよう、役員会をはじめとした会議やセミナー等の定期開催や出席を基盤に、3年後に控える30周年を視野に入れた同窓会活動の展開に

ついての意見交換を継続してきました。これまで同窓会活動の根幹と考えてきた「同窓会名簿」の発行に係る協議をはじめ、本活動を安定的に継続するための体制づくりに関すること、そして活動の担い手となる後任候補の募集や定着方法など議案は尽きませんが、今がまさに検討が必要な時期だと考えています。令和6年は明けて早々、能登半島地震による大規模な被災により全国の様々な支援関係者が災害派遣をはじめとした活動を通じて携わっているところです。本同窓会は様々な場所で活躍する同窓生の一助となる活動を目指し、将来を見据えた活動を展開していきたいと考えております。活動30周年を一つの節目、目標達成の時期と設定し、活動の意味やその必要性を考えながら、会員が相互交流できる仕組みづくり力を入れていきたいと考えております。今後も引き続き福慧会をどうぞよろしくお願ひ致します。

■ <https://www.hoku-iryuo-u.ac.jp/~kango/> ■ kango@hoku-iryuo-u.ac.jp



臨床福祉学部
同窓会長
小畑 友希

看護福祉学部／福祉マネジメント学科・札幌医療福祉専門学校／介護福祉学科

〈創立年:2000年 会員数:約2,226名〉

平素より、同窓会活動にご理解ご協力を賜り誠にありがとうございます。さて、同窓会活動の命題はつながりをつくることにあると思います。その命題を果たすべく活動として、ひとつに再び大学や同窓生とつながるきっかけの場として、総会や同窓会セミナーIがあります。2023年は5月に対面とwebを併用して開催することができました。アクセシビリティは高く、つながりがさらにつながりを生み出します。セミナーIIは、9月に看護福祉学部学会の運営協力しました。そして、これから大学とつながるきっかけづくりとして、「病院で働く相談のしごと講座」の企画運営があります。4年前にこの企画に参加した学生が医療大へ入学し、現在はこの講座の学生スタッフとして活躍しています。3月のコラボ講演会も、他学部同窓会とつながる共同企画です。このような企画に参加することは世代を超えてつながるきっかけにもなります。今後は、横とつながりをつながり続ける企画として、小

規模同窓会事業運営も行いたいと計画しています。少人数で大学の教員を含む同窓会を開催する際に助成します。ぜひ広く活用していただきつなごうを大切にしていきたいと考えています。2023年は学部設立30周年にあたる年でもありました。同窓会企画として、大友芳恵先生、鈴木幸雄先生、向谷地生良先生とゆかりある3名の恩師からメッセージ動画を頂戴しました。先生方は、地域に根をしっかりと張り、福祉を耕し、医療大と創造的で新しい可能性を生み出し広げて欲しいというご意見をいただきました。未来の同窓生に、医療大のハングリー精神を同窓会としてもつないでいきたいと思ひます。今後ともどうぞよろしくご指導ご鞭撻の程お願ひ申し上げます。

■ <https://www.hoku-iryuo-u.ac.jp/~fukudo/> ■ fukudo@hoku-iryuo-u.ac.jp



臨床心理学科
同窓会長
上河邊 力

心理科学部／臨床心理学科

〈創立年:2006年 会員数:約715名〉

平素より同窓会活動への格別のご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。当同窓会では、本年度も同窓会セミナーの開催や在校生向け進路相談会、新入生歓迎会の開催を継続実施しています。昨年度までは動画配信サイトやビデオ会議システムによるオンラインでのイベント開催に限定していましたが、今年度からいよいよ対面での開催も再開しました。同窓会セミナーに関してはオンラインと対面によるハイブリッドとし、全2回のセミナーに200名近い方々にご参加いただきました。特徴的なのは、道外にお住まいの同窓生や医療大学以外で心理学を学ぶ学生、医療大学出身ではない専門職の方々にも多くご参加いただいている点です。北海道医療大学臨床心理学科の名前を全国の多くの方々に知っていただくことができました。医療大の卒業生が同窓会を通して強い結びつきを持っている様子をお見せできたのではないかと感じています。大学院については、定員が20名に

増員されました。今後、医療大からより多くの心の専門家が飛び立つこととなります。同窓会では学部生の同窓生の皆さんを対象とした活動をより一層増やしたいと考えています。具体的には、公認心理師の働き方ややりがいといった現場のリアルな声をお届けできる機会を設けていきたいと考えています。そうした機会をきっかけとして、大学院への進学、公認心理師資格取得を目指す方が1人でも増えてくれたらとても嬉しいことです。当同窓会へも引き続きご支援を賜りますよう、謹んでお願ひ申し上げます。なお、同窓会公式LINEアカウントへの登録がお済みでない同窓生の方は、この機会に是非ご連絡ください。

■ <https://www.hoku-iryuo-u.ac.jp/~p.dousou/>
■ shinri-dousoukai@hotmail.co.jp



理学療法学科
同窓会長
白幡 吏矩

リハビリテーション科学部／理学療法学科

〈創立年:2017年 会員数:約383名〉

平素より理学療法学科同窓会の活動にご理解ご協力くださり、誠にありがとうございます。日頃から活動に対して積極的にご協力頂いている本会役員をはじめ、他学部同窓会の皆様、本学関係者の皆様には改めて御礼申し上げます。本会は2024年4月に、設立から8年目を迎えます。卒業教育の一環として、本会開設より開催しているセミナーは感染症の流行が落ち着いた約3年ぶりに対面で開催となり大変好評をいただきました。また、卒業生や理学療法学科教員の皆様にご協力をいただき、学術支援事業、臨床のお悩み相談会、有志による勉強会、日本理学療法士協会の卒業研修制度への支援、卒業研究発表会への賞の提供など、卒業生ならびに在学学生の日々の活動を後押しすべく、新たな事業を打ち出して参りました。最近では、本会の活動を通して生まれた縦の繋がりに感じる

エピソードが届くようになり、本会の活動に少しずつごたえを感じております。一方で、ライフスタイルの変化などにより、これまで長きにわたり本会を支えてきてくださった役員様の退任を経験するようになり、新たなメンバーで安定して活動を継続するための体制作りを進めております。2026年、設立10年の節目に向け、本会会員、今後迎える新たな卒業生たちの卒業後のサポート体制をさらに充実させていきたいと考えています。引き続き後援会の皆様をはじめ、他学部同窓会の皆様にご指導を頂きながら、本学の発展、本会会員のさらなる活躍の一助となるべく活動して参ります。

■ <https://iryoudaippt.web.fc2.com/> ■ iryoudaippt@gmail.com

(創立年:2017年 会員数:約240名)



作業療法学科
同窓会長

田丸 仁啓

リハビリテーション学部／作業療法学科

作業療法学科同窓会は、令和6年度で開設より8年目を迎えます。設立初年度より顧問である作業療法学科近藤美教授、他学部同窓会役員の皆様には多大なるご支援を賜り、心より御礼申し上げます。現在は約240名の同窓会員で活動しており、今後も毎年30～40名とまだまだ少ない会員数の期間が続きます。少人数という特徴を活かして密に連携をとりながら、当同窓会が同窓生、在学生、在学生のつながらる場としてあり続け、発展していくことを願っております。昨年12月には本学作業療法学科鎌田樹寛教授をお招きし、「認知症対象者との関わり方～作業療法の視点に基づいて～」と題しご講演を頂きました。参加された同窓生からは久しぶりに講義を受け、「学生時代は理解に苦しんだが、働いた今先生の話がスッと入ってきました。学生時代に戻ってもう一度授業を受けたいで

す」といった自身の臨床と照らし合わせ非常に参考になったとご好評頂きました。3年間続いたコロナ禍により、同窓会活動も大きく変化をして参りました。今後も感染対策を念頭に置きつつ共存しながら医療者として活動していくことが求められます。同窓会としても対面活動などを徐々に取り戻し、同窓生の皆様へ還元できるよう同窓会セミナー等の開催も検討して参ります。最後に北海道医療大学後援会の皆様、各同窓会役員の皆様のご理解、ご協力の下に当会の運営が成り立っていますことに深く御礼申し上げます。

■ <https://ot40-jp.webnode.jp/>
■ hokuiryodai.ot@gmail.com

(創立年:1994年 会員数:約1,400名)



言語聴覚療学科
同窓会長

石黒 恵美子

心理科学部・リハビリテーション学部／言語聴覚療学科・ 札幌医療福祉専門学校／言語聴覚療学科・言語聴覚療法専攻学科

当会は札幌医療福祉専門学校の言語聴覚療学科の第1期卒業生により設立され、会員数1400名を超える大きな会になっております。講演会の企画・運営と年に2回の会報の発行を通し現役生・卒業生の皆様への情報提供を行って参りましたが、2020年より主だった活動を休止しておりました。今後は同窓会セミナーの開催を目標に活動再開を予定しております。他学部同窓会と合同開催の講演会「口から食べられる理想に向かって」の企画運営については継続し、3月に対面とオンライン併用で開催しております。毎年多くの皆様にご参加いただき、ありがとうございます。同窓会の運営に関し、日頃より後援会の皆

様が内外の先生方のご理解・ご協力を賜り、深く御礼申し上げます。この度の本学の北広島への移転計画を知り、一卒業生として初めは大変驚きました。計画の詳細をうかがい、新しい土地のメリットを活かし、今後も一層時代に求められる優れた医療・福祉人の育成を通じて、地域社会に貢献してゆく本学の未来の姿を想像し、大きな期待を抱いております。同窓会としてお役に立てることがあれば、大いに協力して参りたいと存じます。

■ st-kai@hoku-iryu-u.ac.jp

(創立年:2023年 会員数:約70名)



臨床検査学科
同窓会長

古高 裕導

医療技術学部／臨床検査学科

平素より医療技術学部同窓会のご活動にご理解ご協力いただき感謝申し上げます。医療技術学部では昨年の春、一期生が北海道医療大学を卒業し、北海道を中心とした各地で活躍しております。そして今年の春、二期生が臨床検査技師として新たに社会へ羽ばたくことをとて嬉しく思っております。二期生は特にコロナ禍による影響を大きく受けた学年でした。満足に大学へ足を運べなかつたり、交流の輪を広げにくい状況が続いたり苦勞も多かったと思えます。学年の垣根を超えた交流が持ちつらかつた分、医療技術学部同窓会が同窓生、在学生そして大学をつなぐ場として皆さんをサポートしていきます。本会は開設して間もない、まだまだ発展途中の同窓会ですが、二期生の皆さ

んが加わることでより活発な会にして行けることを期待しています。今年から医療技術学部同窓会としての活動を本格化していきます。同窓生の要望に応え、細胞検査士を目指す卒業生へ向けたオンラインでの勉強会や、エコー検査を始めた人を対象としたミニレクチャーや本学にあるファントムや実機を用いたハンズオンセミナーを卒業教育の一環として企画・予定しております。その他にも認定資格取得へ向けた勉強会や、最新の臨床検査をテーマとしたセミナーなど、より充実した学べる環境を整備し、北海道医療大学からより良い臨床検査を広げていけるよう活動して参ります。今後ともご支援ご鞭撻のほどよろしく御礼申し上げます。

北海道医療大学同窓会支部等連絡先

■薬学部

支部名	支部長(期)
札幌支部	多田 正人(4)
道北支部	沼野 達行(10)
十勝支部	石原 敦(3)
道南支部	吉田 元(12)
釧根支部	羽田野 貴志(11)
オホーツク支部	森谷 俊憲(13)
胆支支部	寺口 元(6)
青森支部	三上 章(1)
栃木支部	豊住 暢臣(17)
茨城支部	青木 邦子(4)
北越支部	杉本 雅規(3)
神奈川支部	萩原 秀男(5)
東海支部	高尾 信彦(2)
関西支部	山口 和俊(9)
中四国支部	黒長 正明(9)
九州支部	山田 昌人(3)
沖縄支部	村田 成夫(4)

*北越支部 支部長代理

■歯学部

支部名	支部長(期)	連絡先
北海道支部連合会	佐藤 明理(4)	医療法人社団明雄会そのま歯科 ☎011-387-8811
青森県支部	佐藤 孝治(2)	佐藤歯科医院 ☎0172-36-0412
岩手県支部	高野 玄(18)	高野歯科クリニック ☎0197-23-2488
宮城県支部	郷家 道彦(10)	郷家第二歯科医院 ☎022-223-3306
秋田県支部	石川 承平(14)	いしかわ歯科・矯正歯科 ☎018-887-3988
山形県支部	芳賀 俊和(5)	芳賀歯科医院 ☎0238-84-8107
福島県支部	外島 昭夫(7)	ホワイト歯科医院 ☎024-875-3232
茨城県支部	秦 博文(2)	社会医療法人愛宣会 ひたち医療センター歯科 ☎0294-37-0713
栃木県支部	亀田 智(4)	亀田歯科 ☎0282-55-5118
群馬県支部		
埼玉県支部	青木 聡(7)	あおき歯科医院 ☎049-256-2220
千葉県支部	寺山 功(4)	葉山歯科医院 ☎0471-64-6480
東京都支部	姥名 勝之(5)	エビナ歯科医院 ☎03-3200-4818

■看護福祉学部

☎0133-23-1211
○看護学科(内線:3641)担当:明野(実践基礎看護学講座)
○福祉マネジメント学科(内線:3708)担当:池森(介護福祉学講座)

■心理科学部・リハビリテーション科学部

☎0133-23-1211 (学務部 心理科学課・リハビリテーション科学課)
○臨床心理学科 ○作業療法学科
○理学療法学科 ○言語聴覚療学科

*京都府支部 支部長代理



歯科衛生士専門学校
同窓会長

梶 美奈子

歯学部附属歯科衛生士専門学校

皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は、本同窓会の運営に対し、ご理解ご協力を賜りまして厚くお礼申し上げます。1991年に既卒者を中心に結成され、ほんの僅かの人数で同窓会がどのようなか?どんなことをするのか?全くわからぬままスタートした本同窓会も30年の時を重ね会員数は1,300名を超える大所帯となりました。30年を超えて会を無事運営できたのも会員の皆様のご協力と日々会の運営のために努力を惜しまない理事や代表者、皆様のおかげであると感謝しております。2023年、人々を苦しめていた新型コロナウイルス感染症が感染症法上5類へ移行し、人の流れや動きが徐々に大きく幅広くなったのと同じく対面型同窓会セミナーを再開し、総会、理事会を経て新しい役員を迎えることができました。これまで会の運営を担ってきた年長者たちとは、異なる教育を受け、柔軟な考え方を学び新しい文化や物事に対して臨むことなくチャレンジして行くことができる素敵な方々です。歯科衛生士教育は、大きく変わ

(創立年:1991年 正会員数:約1,339名、準会員:19名、特別会員:8名)

りました。教育年限は3年以上となり4年制大学も何校も存在します。それぞれの大学には教授として教鞭をとる歯科衛生士もたくさんいらっしゃいます。1948年に制定された歯科衛生士法には、第二条 この法律において「歯科衛生士」とは、厚生労働大臣の免許を受けて、歯科医師(歯科医業をなすことのできる医師を含む。)の指導のもとに歯牙及び口腔の疾患の予防処置...と記載されていますが、既に歯科衛生士は臨床のみでなく教育、研究、企業など幅広い範囲で活躍しています。これらもとに常に社会のニーズに応え教育を行い、その移り変わりをしなやかに受け止め続けてきた先人たちの努力の賜物であると感謝しております。2024年新しい教育を受け、新しい考えを有する皆様と共に一歩を踏み出し、同窓会が会員の皆様にとってより有益な会であるように努力いたします。

■ <https://www.hoku-iryu-u.ac.jp/~katakuri/> ■ okahashi@hoku-iryu-u.ac.jp

歯学部附属歯科衛生士専門学校同窓会支部連絡先

北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校 ☎0133-23-1211 (内線:3482)担当:大山・岡橋

卒業生を対象とした各セミナー・
公開講座に関するお問い合わせ先

学術交流推進部 地域連携課 ☎0133-23-1129 (直通) E-mail:nice@hoku-iryu-u.ac.jp



Health Sciences University of Hokkaido 50th Anniversary
創立50周年記念特別企画 第2弾

今後の医療大に 期待すること

6名のSCP(学生キャンパス副学長)と10名の同窓会長が、50周年を迎える医療大に、あたたかいメッセージを寄せてくれました。みなさまのご期待に添えるよう、これからも医療大は、さらに進化を続けます。

1974-2024



SCP(学生キャンパス副学長)

**コミュニケーション力を磨く、
対面での意見交換の場を。**

薬学科 2年
大川 哉汰

医療大では、多職種連携科目など自分とは異なる分野の人との合同授業があります。しかし、新型コロナウイルスの影響で、それらの授業がオンライン形式に。対面で直接話し合ったり、発表したりする機会はなくなってしまいました。私は、薬剤師に大切なのはコミュニケーション力だと考えています。今後は、さまざまな学部の学生同士が対面で積極的に意見を交換し、課題を解決する授業がもっと増えてほしいと思っています。

**友だちと勉強できる
小教室を増やしてください。**

歯学科 1年
山本 史織

学生の立場から期待することは、2つあります。1つ目は、大雪などの影響で学校が休講になるときの連絡をもっと早くしてほしいです。寒中、駅で電車を待つのは大変です。2つ目は、友だちと少人数で勉強できるスペースをもっと増やしてほしいです。大きな教室や図書館は、ほかの人たちも使っているので声を出しにくいです。新キャンパスでは、グループワークができる小さな教室をもっとつくってもらえると嬉しいです。

**学生の不安を軽減できるのは、
大学のキャリア支援です。**

看護学科 2年
阿部 珠羅

卒業後の具体的な計画が立てられる環境を、これからも提供してほしいです。「キャリア開発論」という講義では、どのような現場で働くのか、どんな診療科を選ぶのか、在宅や救急などの道へ進むのかなど将来の姿を想像できたことで、勉強への向き合い方も大きく変化しました。一人ひとりの学生に対して、大学が積極的に進路設計のサポートを行ってくれば、将来を考え努力する学生の不安は大きく軽減されると思います。

**各領域のリアルを知り、
進路選択に生かせるように。**

臨床心理学科 2年
平田 勇輝

公認心理師は、「医療」「福祉」「教育」「司法」「産業」の5領域で働くことができ、幅広い分野での活躍が期待されている職業です。授業で公認心理師の方々のお話を聞く機会はありますが、関心のある領域のリアルをもっと深く知り、進路選択に生かせるように、各領域特有のお話を聞ける機会が増えることを期待しています。また、卒業生の方々や、大学院生、同学部の先輩・後輩との交流の機会も増えてほしいと思っています。

**一人ひとりの理想が見つかる、
非教科書的な体験の拡大。**

作業療法学科 2年
田嶋 幸音

資格取得は通過点だと考えています。資格をどう生かすかで、人生は大きく変わると思うからです。どんな選択肢があり、それぞれの道を選んだ人たちは、どんなふうにいるのか。それらのケースにたくさん触れることで、自分にとっての理想が見えてきますし、理想が見えれば勉強がさらに楽しくなります。資格取得に向けた教科書的な学びも必要ですが、一人ひとりが理想を見つけられる非教科書的な体験の拡大を望みます。

**学習面にとどまらない、
他学部との交流の活発化。**

臨床検査学科 2年
鷲谷 杏実

医療技術学部は現在、札幌あいの里キャンパスで学んでいます。今後はキャンパス増設を機に、他学部との交流がもっと活発になってほしいと思っています。学習面でのメリットが増えることはもちろん、クラブ・サークルなどさまざまな活動に参加する学生もさらに増えることで、一人ひとりのキャンパスライフがもっと充実すると期待がふくらみます。今後も続く歴史の一部に、自分が加わっていることの喜びを感じています。

医療系総合大学として、 さらにコミュニケーションを。

薬学部同窓会長
桂 正俊

私は当別キャンパスで最初に学んだ学生であり、大学の歴史の大きな1ページを過ごしました。現在、医療大は6学部9学科1専門学校の医療系総合大学に成長しました。近年は地域の多職種連携やチーム医療でも、医療大を卒業した医療・福祉・介護の関係者がとても多くなり、コミュニケーションが取りやすくなりました。今後は他学部の同窓会と連携を取り、医療系総合大学の強みをさらに生かしていけたらと考えております。

対面で話をする意味を考え、 行動できる医療人の育成。

看護学科同窓会長
川村 武昭

以前は、人と会うことは当たり前のことでしたが、現在は一度も直に会うことのない相手と信頼関係を構築し、困難なプロジェクトやミッションに取り組むことが日常となりました。医療大に期待したいのは、コミュニケーションの意義や必要性、対面で話をする意味を考え、行動できる医療人の育成です。医療系総合大学ならではの方法で、強靱な多職種連携をマネジメントできる専門職業人を育ててほしいと期待しています。

豊かな人間性を持つ、 社会のニーズに即した人材を。

臨床心理学科同窓会長
上河邊 力

医療大での多くの出会いが、今の私を形成しています。仲間との関係は今でも続いており、一人ひとりが頼りになる存在です。先生方は、学生と接するその姿勢をもって、対人支援職のありようを教えてくださいました。私たちに求められているのは、被支援者となる方の思いや状況に心から寄り添い、共感できる豊かな人間性。引き続き、社会のニーズに即した人材を世に送り出してほしいと願っています。

キャンパス増設を追い風に、 さらなる飛躍を期待します。

作業療法学科同窓会長
田丸 仁啓

私は作業療法学科の1期生として入学しました。不安を抱えながら大学生活をスタートさせましたが、同級生や部活の先輩方、教職員の方々のサポートを受け、学部学科にとらわれないつながりが、瞬間に広がっていきました。4年間で出会った仲間たちは、今も大切な存在です。医療大は今年で50年、作業療法学科は11年目を迎えます。キャンパス増設を追い風に、医療系総合大学としてのさらなる飛躍を期待しています。

若い学部も一緒に、 発展していけるように。

臨床検査学科同窓会長
古高 裕導

医療技術学部は、昨年初の卒業生を出したばかりの若い学部ではありますが、他学部と同様にこれからの医療大に貢献していくことを期待しています。同窓会では、勉強会やセミナー、懇親会などの活動を通して、在学生・同窓生をさまざまな面からサポートしていきます。創立50周年は、通過点のひとつであり、ゴールではない。副学長である和田啓爾先生がそう仰っていたとおり、今後もさらなる発展を願っています。

強く、優しく、柔らかく。 人に寄り添う母校。

歯学部同窓会長
蓑輪 隆宏

子どもたちが実家に帰って落ち着き、穏やかな気持ちになるように。母校も、母のいる実家のような、多くの学生や卒業生が戻って自分の原点を見つめ直すことができるような、愛に満ちた空間になってくれることを期待します。医療大は、医療系総合大学として北海道の医療の屋台骨を支えています。今後はその特徴や価値をさらに生かし、愛あふれる多くの医療人を社会に輩出する大学であり続けてほしいと願っています。

創造力と連帯の精神で、 分け隔てのない社会へ。

福祉マネジメント学科同窓会長
小畑 友希

福祉マネジメントは、地域社会を豊かにすることだと思います。障がいのある人たちが地域で働くことを通して、社会が多様性を理解し、受け止めることになります。さらに、地域に必要とされ、経済活動にも一役担うことになります。福祉という糸口から、社会を変革することも不可能ではありません。医療大で培った創造力と連帯の精神で、障がいのある人もない人も分け隔てないことが当たり前の社会をめざせたらと思っています。

新たな柱のもと、 選ばれる理学療法学科へ。

理学療法学科同窓会長
白幡 吏矩

チームで学ぶ経験は、卒業生の日々の業務に大きな効果を生み出していると実感しています。今後は、チーム医療、地域での経験に並ぶ新たな柱が生み出され、理学療法士の志望者に選ばれる理学療法学科、理学療法士が飽和する時代においても活躍できる人材を養成する理学療法学科へと、さらなる発展を遂げることを願っております。そして、卒業生を対象とした取り組みも、さらに幅広く展開していただきたいと期待しています。

他学科との共学、交流で、 時代に求められる専門職を。

言語聴覚療法学科同窓会長
石黒 恵美子

北海道内で、PT・OT・STの3学科がすべて揃っている大学は医療大のみです。他学科や他学部との共学、交流を通して早くからチーム医療を学べる環境は、ほかの大学にない大きな特長です。キャンパス増設計画については、新しい土地のメリットを生かし、今後も時代に求められる優れた専門職の育成を通して、地域社会にいっそう貢献していく未来の姿を想像しています。この先の50年にも、大きな期待を抱いています。

古い慣習にとらわれず、 医療を変える。

歯科衛生士専門学校同窓会長
梶 美奈子

医療大のホームページにアクセスすると、「チームで学ぶ。医療を変える。」と大きなスローガンが掲げられています。私が学生だった大昔は、医療現場にも上下関係があったと記憶しています。しかし、医療大で学んだ同窓生たちは、古い慣習にとらわれず、お互いに協力し、高め合い、尊敬するという基盤を身につけているはず。これまで以上にチームで学び、医療をさらに変えていく。今後の医療大が、とても楽しみです。

研究型から、プロジェクト型へ。 福祉マネジメント学科を象徴する科目です。

2022年、旧・臨床福祉学科は、福祉マネジメント学科へと生まれ変わりました。これからの福祉専門職には、ケアサービスの専門性だけでなく、地域社会をより良くするためのマネジメント力が求められているためです。その進化を象徴するのが「プロジェクト演習」*。いわゆるゼミナールで、論文講読や卒業研究を中心に取り組む科目でしたが、学生主体の活動を重視するスタイルへとシフトしました。今回は、宮本雅央准教授にゼミでの実際の活動について伺いました。

*3年次後期「プロジェクト演習I」と4年次通年「プロジェクト演習II」で構成。

暮らす人の思いに、着目する。

「プロジェクト演習」は、3年次後期からはじまります。今年度は12のゼミが開講されました。宮本ゼミのテーマは、ソーシャルイノベーション。地域社会をより良くするために、人と人のつながり方をアップデートする。そんなプロジェクトを自分たちでやってみようという活動概要です。この度は、2022年度に受け入れた宮本ゼミの学生5人が、3・4年次に取り組んだ内容をご紹介します。

3年次後期は、研究法・調査法の学習や文献講読に加えて、フィールドワークも実施しました。月形町、余市町、千歳市などへ足を運び、地域包括支援センター、福祉施設、そして博物館なども見学。地域ごとに異なる生活実態や、あまり知られていない事実に触れることで、自分たちはどんなプロジェクトを行うか、イメージを広げることが目的です。重要なのは、そこで暮らす人の思いや声に着目すること。学生はそう実感できたようです。

冬を迎えると、4年次から取り組むプロジェクトの素案を考えはじめます。私がアドバイスをを行ううえで大切にしているのは、自己満足になっていないか。学生自身が楽しむことはもちろん大事ですが、地域住民や専門職のためになることが目的です。数カ月の議論を経て、5人のプロジェクト名は「もっと知りたい向陽台」に決まりました。

もっと知りたい。知ってほしい。

向陽台とは、千歳市にある住宅街。3年次後期に訪れた場所のひとつです。移住してきた方々が多いこと、高齢化が進むエリアがあること、そしてエリアによって住民の年代が異なることが特性。その影響からか、住民同士の関わりを拒む方もいます。もし住民同士のつながりが増えれば、病気や



フィールドワークに臨む、宮本ゼミの学生5人。



住民の方々の声を聞くインタビュー。写真撮影も学生が担当。

怪我の重症化リスクを軽減することができます。

そこで学生は、向陽台で暮らす方々の声を集めたパンフレットを制作し、地域全体に配布するというプロジェクトを考案。向陽台には、こんな人が暮らしている。そのことを自分たちが知りたい、そして、ご近所の方々にも知ってほしいという思いから、「もっと知りたい向陽台」プロジェクトは生まれました。

プロジェクトの核となるのは、住民の方々のインタビューです。学生は地域包括支援センターの職員と直接やりとりを行って協力者を募りました。告知チラシを自分たちでつくるなど工夫した結果、9人の方々が協力してくれることに。もちろん、インタビューを行う日程の調整なども自分たちで行いました。そして、パンフレットの紙面構成には「フォトボイス」と呼ばれる手法を活用。文字だけではなく写真も効果的に使用することで、目を通しやすくなる、リアルな声を届けられるという効果が期待できます。

写真を撮る。声を聞く。

住民の方々のインタビューと写真撮影は、昨年9月に行われました。本学教員や地域包括支援センター職員は立ち会いません。ご自宅や指定された場所に学生が直接訪れ、向陽台のこと、ご自身の暮らしのことなどさまざまな話を聞いてきました。

Gさんは、まちの景色が変わって外出が怖くなったといいます。Iさんは、感染症の影響で来客が減ったことを嘆いていました。一方で、木の彫刻をつくるのが趣味のMさんや、旅行先で見つけたコーヒークップをコレクションしているYさん。住民の方々のリアルな暮らしが浮

看護福祉学部福祉マネジメント学科 准教授

宮本 雅央

2005年、本学看護福祉学部医療福祉学科(現・福祉マネジメント学科)卒業。2007年、同大学院看護福祉学研究科臨床福祉学専攻修士課程修了。秋田看護福祉大学、群馬医療福祉大学、青森県立保健大学の教員などを経て、2022年本学着任。



学生が制作したパンフレット「もっと知りたい向陽台」の表紙。

かび上がってきました。インタビューを経て、「これまでとは違うつながりが生まれてほしい」という学生の思いはより強くなったようです。

10月から11月にかけて、パンフレットを制作。住民の方々の声や、向陽台の自然豊かな風景を伝える40ページの力作が完成しました。また、他大学とのゼミ活動交流会に向けてプレゼンテーションの準備も行いました。パンフレットは後日、地域包括支援センターを通して住民の方々へ届けられました。そして、プロジェクトの趣旨と実施内容がまとまったその成果物は、後輩たちにとっても有意義な財産となります。

学生だから、できること。

宮本ゼミの活動は、学生が自分たちで考え実施するプロジェクトが中心です。もちろん指導教員として知識・技術のインプットやサポートを行います。実施内容には極力介入しません。それは、学生だからできることがあると信じているからです。

住民同士の関わりや福祉サービスを拒む方も、利害関係のない学生になら、心のうちを話してくれるかもしれません。その人の力になりたい、という学生の純粋な思いは、その人を、地域社会を動かせるかもしれません。私は本学科卒業生のひとりですが、学生時代にそのことを実感しました。現・学科長である志水先生のゼミで、山形県酒田市の飛島に1週間滞在し、生活実態と幸福感を調査するフィールドワークを経験。住民の方々と交流を通して信頼関係を築いていけたよごびは、今でも忘れません。

福祉マネジメント学科は、これからの時代の福祉専門職を育てる学科です。地域社会をより良くするためのマネジメント力を身につける、実体験の場の創出。それが、私の役割だと考えています。

卒業生訪問

2013年4月開設のリハビリテーション科学部の1期生、渡邊さんを訪ねました。臨床活動と研究活動の双翼で、もっと高く、もっと遠くへ、羽ばたきの力強さが日に日に増す卒業7年の理学療法士です。

イムス札幌消化器中央総合病院

渡邊 康介さん (リハビリテーション科学部理学療法学科2017年卒業)

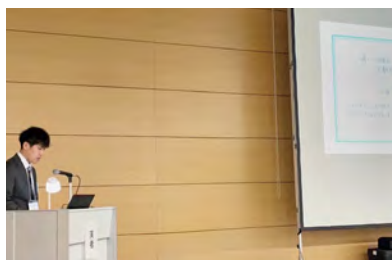


外来・病棟、訪問リハも。

渡邊さんは、消化器領域を中心に15の診療科、183の病床を有するイムス札幌消化器中央総合病院のリハビリテーション科の主任です。午前中はリハビリテーション室で外来及び入院患者さんのリハビリテーションを4人担当、午後は併設する訪問リハビリテーション事業所の利用者さん宅を2軒訪問、夕方は管理業務、委員会活動、科内や他部門との会議などに充てるといのが1日の流れといいます。同院で活発な委員会活動では、現在入院患者さんの安全な生活のために転倒・転落対策防止チームに参加し、リハビリテーションの責任者として立案を担っています。

「カッコいい」がきっかけ。

ご本人いわく「まじめな学生じゃなかった」渡邊さんは就職後に理学療法、リハビリテーションの面白さに出会いとこになったようです。「1年目にとでもお世話になった、臨床と研究を両立させる先輩がかっこよくて、単純な憧れから学会に参加してみた」と言い、学会のアカデミックな雰囲気とリハビリテーションに真正面から向き合う発表者の姿に触発され「研究のケの字もなかった」はずが、翌年にはさっそく自らが学会での発表に立っていたそうです。「振り返ると冷や汗ものの発表でしたが、それ以来学会



2019年から学会発表を続け、2023年には2回発表、2024年は「可能なら3回発表したい」と意気込みます。写真は2023年秋の日本予防理学療法学会での発表。



同院リハビリテーション科に在籍する理学療法士、作業療法士、言語聴覚士総勢45人の3分の1が本学卒業生。とくに2020年以降は毎年採用者の半数以上を占めるそう。もちろん、訪問リハビリテーション(写真)、病院のリハビリテーション室共に出身校を超えてリスペクトし合う抜群のチームワークです。

発表を自分に課し実行することで、自身の成長を実感しています」。物おじしない姿勢で、渡邊さんは次々と新たな扉を開いてきました。

未来の自分に宿題を。

ためらわずに動き出す、手を挙げる、が渡邊さん流。動くほど知見、経験、人脈が広がっています。職場でも、院内と訪問の兼任は自らの希望でし、責任あるポジションには積極的に手を挙げてきたといいます。

研究活動は現在2つのテーマで進行中です。1つ目は北海道リハビリテーション専門職協会がメンバーを募った研究チームで取り組むもので、高齢者の主観的健康感の高さ(自分ほどの程度健康だと思うか)と実際の健康状態の関連を既存のデータベースを基に視点を変えた分析で探るものです。「気持ちが健康な人ほど体の健康も保ちやすい」というイメージに科学的に迫ります。2つ目は日本リハビリテーション栄養学会のガイドライン作成です。同窓生から声がかかって飛び込んだプロジェクトで年内のゴールへ向けて邁進中です。

「未来の自分に宿題を出す」ことでモチベーションを維持しているという渡邊さんがいま学会発表のほかに抱える大きな宿題は論文です。研究チームの先輩のアドバイスを受けながら取り組もうとしています。

「好き」を味方に。

充実の臨床活動とプライベートな時間を使う研究活動の両立は正直きつくないのか尋ねると「この仕事は自分に合っている。本当に好きです。一緒に楽しく働ける同僚とチャンスがくれて意欲を後押ししてくれる上司のいる職場も好き。好きなことを好きな環境でできるって最高ですよ」とポジティブなお答え。では、両立で得られるやりがいは何でしょう。「利己的に聞こえるかもしれませんが、いまは自分の成長を実感できることが一番です。この先、私の成長が患者さんのためになり、私の出す成果がよりよいリハビリテーションの提供につながっていけば、やりがいはさらに大きくなるでしょうね」。

がつつたところがなく自然体の渡邊さん。すでに後輩の目には十分かっこよく映っているはずだ。



訪問リハビリテーションでは管理者を務めます。「スタッフが楽しく働いて成果を残せる、そんな職場をつくりたいです」

2023年度 地区別懇談会を開催しました。

2023年10月1日～11月5日にかけて、地区別懇談会を開催しました。本会は北海道医療大学後援会が主催しており、全国15地区17会場で計529組(740名)のご父母の皆様にご出席いただきました。各地の懇談会では、後援会の臨時総会及び、ご父母同士の交流の場として立食形式の支部懇談会が開催されました。また、教員との個別面談が午前・午後の2部制で実施され、学生生活や成績等について熱心に相談されていました。地区別懇談会は、後援会が「ご父母の皆様と学園を繋ぐ貴重な架け橋」として最も重要視している事業のひとつであり、皆様により一



層ご満足いただけるよう、内容の更なる充実に向け、今後も改善を図って参りますので、温かいご支援、ご理解とご協力を賜りますとともに、来年度もぜひご出席くださいますようお願い申し上げます。

第5回台北医学大学・本学歯学部間 合同シンポジウムを開催しました。

2023年11月27日に本学歯学部と台北医学大学口腔医学院との第5回目となる合同シンポジウムが、本学中央講義棟10階にて開催されました。本シンポジウムは、2018年から始まり、両校が持ち回りで毎年開催していましたが、コロナの影響により、第3回・第4回はオンラインにて実施しており、今回、久々の現地開催となりました。両校からそれぞれ2名ずつ講演を行い、活発な質疑応答がなされました。また、シンポジウムの中で、両大学院で提携しているデュアル・ディグリー制度の協定更新式が行われ、



両学部長がそれぞれ、協定書に署名致しました。台北医学大学とは、薬学部・看護福祉学部間でも活発な交流があり、2024年3月には台北医学大学にて行われる短期研修に本学学部生を派遣する予定です。今後も両大学間の更なる交流拡大が期待されます。

バスケットボール部 女子第68回 北海道大学バスケットボール選手権大会 2部リーグ優勝報告会が行われました。

2023年12月26日、北海道大学バスケットボール連盟女子第68回北海道大学バスケットボール選手権大会2部リーグの優勝報告会が行われました。女子バスケットボール部からは部員4名と高橋副部長が出席し、主将の町屋凜夏さん(理学療法学科3年)から学長・副学長へ大会の戦績、1部リーグ昇格及び今後の抱負が伝えられました。浅香学長ならびに和田副学長より賞賛と激励のお言葉をいただき、来年度から所属する1部リーグにおける更なる活躍と勉学との両立に向け、より一層気を引き締めた様子でした。本学バスケットボール部女子は、今大会において2部リーグを7勝0敗の戦績で優勝し、1部リーグ所属チームとの入れ替え戦にも勝利をおさめ、2014年度以来の1部リーグ昇格を果たしました。強豪ひしめく1部リーグにおいて更なる活躍が期待されます。

なお、本大会では以下の学生が最優秀選手賞を受賞いたしました。
2部最優秀選手賞 山下 美子さん(看護学科2年)

本学医療技術学部 臨床検査学科 江本美穂講師が電子スピンスイセンス 学会奨励賞を受賞しました。

2023年11月2日～4日に神戸大学 百年記念館 六甲ホール・瀧川記念学術交流会館で開催された「第62回電子スピンスイセンス学会」において、本学医療技術学部臨床検査学科 江本美穂講師が奨励賞を受賞しました。今回の奨励賞は江本講師がこれまで研究を続けてきた、疾患モデルマウスに関する脳内酸化ストレスイメージング研究の功績に対して贈られました。受賞講演では、近年主に行っているEPRイメージング法を用いた、アルツハイマー病モデルマウスにおける脳内酸化ストレス状態とAβの蓄積や運動との関連などについて報告を行いました。今後、新たなプローブ開発や他のモダリティとの組み合わせを検討するなどして、アルツハイマー病早期発見に繋がる研究展開が期待されます。



演題名 病態解明に向けたEPR法による
マウス脳内酸化ストレス状態のイメージング研究

EDITOR'S NOTE

新型コロナの世界的流行が始まってから早5年目に入りましたが、本学ではこの春、コロナの流行の最中に入学した学生が卒業を迎えます。最初の年、学生が一人もいないキャンパスで、教室から教卓のPCの画面に向かって必死に話しかけて授業をしたことを思い出しますが、学生からも、あの時はオンライン授業で友達作りもしくんどかつたと言います。ですが、学生は制限の中でも、試行錯誤しながら多くのことを学び、様々な人との繋がりを作って来ました。コロナの流行以降、学ぶ場を維持し続けるために教職員が奮闘してきたことは勿論ですが、卒業まで頑張ってきた学生たちの奮闘を讃えたいと思います。大学という場は、すでにある知識や理論を習得するだけでなく、現在の価値観や常識(医療に直接関わることもそれ以外も)、自身が生きる社会や人間の在り方がこの先変化していく中でも、様々な視点から何をすべきかを判断し学び続ける人を育てる場ですが、コロナ禍を過ごしてきた学生たちは、図らずも、そうした当たり前が揺るがせられる状況に直面し続けていたと思います。本学での学びの意義を忘れず、この先も社会や人間、医療の在り方が変化する中でも自身がどう関わり何をすべきかを考え続けて欲しいと思います。本学もまた本年で創立50周年という節目を迎え、また昨年は数年後のキャンパス増設が発表される等、変化の波の中に居ますが、今後も医療系総合大学としての意義を考えながら様々な取り組みを行い、またそれを広報していければと思います。皆様のご支援ご協力を頂ければ幸いです。よろしく願い申し上げます。

(M.Y記)

ADVANCE

北海道医療大学広報誌 No.182

STAFF ● 遠藤 泰 浜上 尚也 志茂 剛 飯嶋 雅弘
内ヶ島伸也 奥田かおり 鈴木 和 青藤 恵一
福田 実奈 大須田祐亮 山田 桃子 葛西 聡子
近藤 啓 高橋 祐輔 秋元 奈美 三川 清輝
小林 昭博 土橋 幸

発行日 ● 2024年3月

編集・発行 ● 北海道医療大学広報部 入試広報課
〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757
TEL: 0133-22-2113
http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/

広報誌についてのご意見・ご要望・情報等をお待ちしています。
E-mail: nyushi@hoku-iryu-u.ac.jp



■北海道医療大学の教育理念
生命の尊重と個人の尊厳を基本として、保健と医療と福祉の連携・統合をめざす創造的な教育を推進し、確かな知識・技術と幅広い教養を身につけた人間性豊かな専門職業人を育成することによって地域社会ならびに国際社会に貢献することを北海道医療大学の教育理念とする。